

結論



結 論

本論文は「序論」「本論」「結論」の三つの部分から成り立っている。そして本論では第1章「江戸川乱歩の「探偵小説」—ジャンル論からのアプローチ」、第2章「「人間椅子」論」、第3章「「屋根裏の散歩者」論」、第4章「「陰獣」論」という4章構成になっている。本論文の方法論として、まずジャンルとしての「探偵小説」に注目し、日本の「探偵小説」の歴史的展開及び江戸川乱歩の位置付けを論じた。次には「作品の構成」「身体感覚」「人物造形」などの論点から江戸川乱歩の作品「人間椅子」「屋根裏の散歩者」「陰獣」の読解を試みたものである。本論文の構成に従って、その結論を以下に述べる。

1. 江戸川乱歩の「探偵小説」—ジャンル論からのアプローチ—

本論文第1章第1節「「探偵小説」というジャンル」では、「探偵小説」という文学ジャンルの誕生や「探偵小説」の定義、歴史的展開などを簡略にまとめた。ジャンル論としてまず廣野由美子の論を引用し、ミステリーにおけるプロットの重要性を論じた。続いて江戸川乱歩自身が分類した三種類の「探偵小説」「ゲーム探偵小説」「非ゲーム探偵小説」「倒叙探偵小説」の内容をまとめ、「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く径路の面白さを主眼とする文学である」（江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第26巻 幻影城』p.21）との定義を検証した。

日本の「探偵小説」の歴史的展開は、中国の公案小説や江戸時代の比事物など裁判小説に遡る。そして明治時代に、西洋から日本へ伝来した犯罪実話の記録集と「探偵小説」の翻訳は、日本近代「探偵小説」創作の最初のモデルとなった。また日本の純文学の作家、例えば佐藤春夫の「指紋」（『中央公論』大正7年）、芥川龍之介の「開化の殺人」（『中央公論』大正7年）、谷崎潤一郎の「二人の芸術家の話」（『中央公論』大正7年）などの作品も後世の「探偵小説」の作家に深い影響を与えた。

大正9(1920)年の『新青年』という雑誌の創刊が日本の「探偵作家」の育成、日本の「探偵小説」理論の確立に大きく貢献した。特に『新青年』から「探偵小説」家として一步を踏み出した江戸川乱歩は膨大な作品を残し、さらに「探偵小説」の研究分野においても『幻影城』『続・幻影城』などの評論集を著し、

成果を残した。

「探偵小説」の定義や発生、及び「探偵小説」の歴史的展開、江戸川乱歩の貢献については以上に述べた通りである。

2. 「人間椅子」「屋根裏の散歩者」「陰獣」の構成

「人間椅子」「屋根裏の散歩者」「陰獣」は乱歩が大正 14(1925)年から昭和 3(1928)年までの 3 年間に発表した作品である。乱歩が「陰獣」を発表してから、娯楽性の高い通俗の長編（通俗長編）や少年向けの「探偵小説」（少年探偵団シリーズ）を創作するようになったのは、世間が大衆小説を求めた当時の時勢による改変である。

本論第 2 章第 1 節では「人間椅子」の構造を論じる。作中作としての「人間椅子」は外枠の物語においても、内包する物語においても、ストーリーとプロットの配置の変換がなされ、「発端の不思議性」「中道のサスペンス」「結末の意外性」という「探偵小説」の三要素が取り込まれている。また外枠の三人称の語り手と内包する物語の一人称の語り手が巧みに使い分けられ、本作品の語りの多様性を示している。

「屋根裏の散歩者」は乱歩の言う「倒叙探偵小説」の代表作である。本論第 3 章第 1 節ではストーリーとプロットの分析を通して、乱歩が定義した「倒叙探偵小説」の要素である「犯人の心理描写」「犯罪動機」「犯行の過程」「探偵による事件解決」を分析してみた。本作品の発端で主人公・郷田三郎の不思議な性格描写と、中途の郷田の殺人過程の描写と心理描写、そして終わりにおける探偵明智小五郎の唐突な出現など、一連の構成には乱歩の主張する「探偵小説」三要素が見られる。また「倒叙探偵小説」の最大の特徴である犯人の心理描写も焦点化の変換を通して、はっきりと示されているのである。

そして第 4 章第 1 節では「陰獣」の構造分析を試みた。「陰獣」の最終部に謎を残したままの結末は当時においてかなり非難を招いたようであるが、最後まで犯人がわからずサスペンスに満ちた作品と言えよう。そして意外な結末は作品に余韻を与え、とても効果的である。さらに井上良夫が指摘した通り、「陰獣」には「適度な暗示」が鑲められており、構成と叙述の妙が強く感じられる作品である。

以上の検証した結論を見ると、この三作品は構造面において叙述のうまさが見られ、またプロット構成などの構造の面においても非常に評価すべき作品で

ある。

3. 「人間椅子」「屋根裏の散歩者」「陰獣」における感覚・身体描写

江戸川乱歩の作品にはさまざまな感覚、身体描写が見られる。本論第2章第2節では「人間椅子」の感覚表現を論じてみた。「人間椅子」の主人公の〈私〉は視覚的価値観において劣等感を感じ、自分の理想郷としての椅子の中に隠れ、視覚の知覚認識を遮断している。そして触覚、聴覚などをもって、外界の物事を認識している。椅子という小さな異空間で、最大限まで増幅させた〈私〉の触覚の体験を描きあげた点において、乱歩は触覚体験に訴える優れた作品を生み出している。

本論第3章第2節では「屋根裏の散歩者」における視覚表現を取り上げ、特に覗き見に焦点をしばって論じた。「人間椅子」と違い、「屋根裏の散歩者」は覗き見など、常軌を逸した視覚体験を読者に提示している。そして屋根裏から他人の生活を覗き見る異様な行動と視線の描写を通して、主人公・郷田三郎の異常性格が鮮明に描き出されている。

本論第4章第2節で取りあげたのは、マゾヒズムである。「陰獣」はマゾヒズムとサディズムという異常性欲の身体描写を通して、色濃い耽美的な作風を示している。特に女主人公・静子の傷痕の描写と、彼女が鞭打たれた時の身体の描写を見事に描きあげた「陰獣」は官能的な「探偵小説」の傑作と言える。

以上の検証した結論を見ると、「探偵小説は科学と芸術の混血児の如きもの」（江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第26巻 幻影城』p.26）と考える乱歩が、「探偵小説」における文学性を見い出そうとして、自分の作品で叙述・表現の技巧などをいろいろと工夫したことがわかる。

4. 「人間椅子」「屋根裏の散歩者」「陰獣」の人物造形

本論第2、3、4章の第3節では、人物造形及び性格描写に注目し、「人間椅子」「屋根裏の散歩者」「陰獣」における人物像の分析を試みた。「人間椅子」の主要人物は女主人公・佳子と、佳子に告白の手紙を送った男・〈私〉である。そして手紙において、〈私〉の芸術品に対する職人氣質や、エゴイズム、現実の自分に対する劣等感などの人格特質が見られる。また〈私〉の佳子に対する憧れも詳しく描写されている。もう一人の主人公である佳子は良妻の一面を持ち、また知的イメージのある現代女性として描かれている。

「屋根裏の散歩者」の主要人物は犯人・郷田三郎、探偵・明智小五郎、被害者・遠藤である。犯人郷田は飽きっぽい人で、覗き見や変装癖など異様な行為に深く興味を示した。また彼の犯罪欲は異常に強く、探偵の明智に対して競争心を抱いている。もう一人の主人公である明智はだらしない書生のような格好と、職業がない遊民のように生活しているが、どこか天才的な風格を持ち、理知的な探偵として造形されている。もう一方、被害者の遠藤は明るくテンションの高い人であり、そして強気で自慢したが、完璧主義者などの特質を示している。

第4章第3節では主に「陰獣」の寒川と大江春泥、そして小山田静子という三人の登場人物を論証の対象とする。寒川は自分を道德意識の高い人と考えているが、一方では、人間の冷酷さ、残虐性などの異常な心理に深く興味を示している。容疑者として登場する大江春泥は、異様な犯罪欲と残虐性を持ち合わせた人物であり、そして復讐に対してただならぬ執着を示している。女主人公の静子のはか弱い一面と、積極的な行動力が見られ、魔性じみた、被虐嗜好のある女性として描かれている。

以上の検証が示すように、「人間椅子」と「陰獣」の女主人公にはともに美しく聡明で自我の強い現代女性のイメージがある。このような女性の人物造形は乱歩が生きた時代、つまり開化期の明治時代の女性イメージの変化を反映していると考えられる。

また、「探偵小説」において、最も重要な犯人の人物設定であるが、乱歩の作品に描かれている犯人像は常軌から逸脱したキャラクターが多い。性格においてその異常性が鮮明に描き出された人物として「人間椅子」の家具職人の〈私〉、「屋根裏の散歩者」の郷田三郎、そして「陰獣」の大江春泥がある。本論で取り上げた三つの作品に登場する人物の分析を通して、乱歩の人物造形及び心理描写がいかに優れているのかが明らかとなった。

5. 今後の展望

本論文は乱歩の「人間椅子」「屋根裏の散歩者」「陰獣」を取り上げ、作品の構成と、作中人物の感覚・身体描写、及び人物造形を多角的に論じたものである。そして本論の三作品の論考において、乱歩の「探偵小説」は理知的な展開と芸術性を具えており、高い文学的価値を有する作品であることがわかる。しかし本論が取り扱ったのは上述の三つの作品のみで、幅広く乱歩の作品を論じ

ることはできなかった。それゆえに今後は「探偵小説」というジャンルについてもっと深く研究し、乱歩作品の多様性と理論の展開の可能性を研究したい。筆者の能力不足や資料の蒐集の不十分により考察が行き届かない部分も多いと思われるが、これらの問題を反省点とし、もっと深い鑑賞力と作品に対する的確な批評力を養いたい。

